慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ニュース普及過程研究に関する少考
Sub Title	
Author	金, 官圭(Kimu, Kankyū)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.16- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニュース普及過程研究に関する少考

金　官圭

我々は最近ロシアのウクライナ侵攻に関する様々な映像をニュースを通して接している。ロシアの無差別攻撃により犠牲になったウクライナの人々や破壊された町の姿、そして戦闘の生々しい映像を絶えず見ているのである。私は社会に対するメディアの影響を最も分かりやすく理解できる出来事が戦争であろうと考えており、それに関する研究をいくつか重ねてきている。特に戦争の映像がどのようなやり方で撮影され、いかなるチャンネルを通して伝えられるのであるかを真剣に分析している。ロシア軍の残酷さに怒りながらも、一方でこの戦争における新しい報道のやり方を一生懸命に探しているのである。今度の戦争で注目すべき新しいものは現地ライブカメラ映像とドローン映像であると考える。ウクライナの都市のいろいろな場所に設置されている現地ライブカメラに移されたライブ映像が SNS を通して世界に伝えられ、戦闘の瞬間をドローンを持って撮影した映像がウクライナ軍によって発信されたのである。

これを新しく面白い現象であると思い、授業や関連研究で活用するために資料を整理したいと考えている。このような考えが研究者としては当然な思考過程かもしれないが、まるで戦争を待っていたのではないかという自責の念を感じたりもするのである。その感じは私を三田の大学院生だった時につれていく。戦争、災害、暗殺、死亡など不幸な出来事が発生するのを持っている研究者の心について大学院の時に青池先生としばしば話したことがある。ニュースの普及過程を研究する研究者はやや残酷な人々であるかも知れない’という表現が頭に思い浮かんだのである。これは青池先生がニュースの普及過程を論議するときに冗談まじりに話した表現である。

青池先生はニュースの普及過程に関する研究成果をまとめられ、2012 年に『ニュースの普及過程分析（慶応義塾大学出版会）』を刊行された。その本の中でニュース普及研究者に関する先生の考えを伺える内容がよくまとめられている。それは次のようなものである。

ニュース普及過程の研究は、Miller (1945) がルーズベルト大統領死亡のニュースがどのように全米に広がったのかを調べたことが始まりである。このニュースが研究対象になったのは、すべての人々にとって普遍的な重要性を持ち、国民の大多数に早く伝わっていけるニュースのアイテムは悲劇な出来事が多いことと関連しているからである。Miller (1945) の研究以来、悲劇的なニュースを対象としたニュース普及過程研究が続けられてきた。Larsen and Hill (1954) がタフト上院議員 (Senate Robert Taft) 死亡のニュースの普及過程を研究したが、これの対象もやはり全米において有名であった政治家の死亡である。特にこの研究は青池先生がニュース普及過程研究者の残酷さを話したことのきっかけになっている。青池先生は Larsen and Hill (1954) の研究をニュース普及過程研究初期における代表的研究であると高く評価しているが、その研究枠組み、諸発見の豊富さ、理論的検討と解釈、そして今後の研究にとって有益な示唆など研究の模範とも言えるからである（青池, 2012:58-59）。このような優れた研究成果を挙げることができた背景には、Larsen and Hill (1954) の研究は研究のための準備作業が十分に行われていたからである。青池先生はこの事情を Rogers (2000) の表現を引用し次のように整理している。

「ニュース普及過程研究は Rogers (2000) が述べているように、ニュースの普及過程につい

金官圭「ニュース普及過程研究に関する少考」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）16-18 頁

て調査を行う上での困難な問題の一つとして次のような問題を本来的に持っているのである。[中略] 研究対象であるコミュニケーション行動は、あまりに急速に行なわれる―しばしば数時間の間、もしくは一日の間に行なわれる―ので、財団、政府機関、そしてその他などからの研究資金を得るために申請することにおいてはいうまでもなく、 調査者（研究者）は十分な調査票を作成すること、調査員をしっかりと訓練すること、調査対象である人々からデータを十分に蒐集することができないのである。以上の研究上の問題を持っているが故に、ニュース普及過程研究はしばしば、消防自動車(fire engine study)、すなわち出来事が生じてから調査研究者達が出来事に向かって駆け付ける研究(De Fleur, 1987)とされるといってよいであろう。Rogers (2000) は、消防署研究 (firehouse research) としている。」（青池、2012:58-59）

ニュース普及研究者の残酷さというのは、研究者が事前に準備をしておかないと正確な研究ができないということと、普段悲劇的なニュースが調査対象になる確率が高いということとが重なって、ニュース普及研究者は社会に大きな悲劇的な出来事が起きるのを真剣に待っている人に違いないということを冗談まじりに話されたのだろう。いずれにしても大きな悲劇的ニュースがニュース普及過程研究の対象になったことはその後にも変わらなかったのである。1963 年米国ケネディ大統領暗殺のニュース普及過程が、Greenberg (1964) をはじめ多くの研究者によって研究されたのである。また 1981 年に発生したレーガン大統領暗殺未遂事件のニュースも研究対象になったことは言うまでもない。

私も青池先生の影響を受け、ニュース普及過程に関心を持ち、いくつかの研究を行なっている。その研究対象は盧武鉉元大統領の自殺や北朝鮮の核実験など悲劇的もしくは衝撃的なニュースであり、そのニュースが韓国社会にどのように広がったかを分析したのである。またニュース普及過程研究の主題として戦争とメディアとの関わりに興味をもっている。戦争とメディアの研究主題はマスコミュニケーション研究において数という側面から見るとそれほど盛んには行われていない。その主な理由として戦争というものはあまり頻繁に発生しない出来事であり、戦争の発生を研究者が予測することは難しいからであろう。戦争が起きることを待ちながら研究調査に備えていくということは、悲劇が起きることを待っている研究者の残酷さという青池先生の表現に当てはまる側面があると考えられる。戦争というものは言うまでもなく当事者においては最も残酷であり、家族や友人の犠牲は生きていられないほどの哀切さをもたらすであろう。しかし私の目には戦争の現場の悲劇と共にそれを伝える映像を撮影した技術と伝送路も同じ重さで入ってくるのである。

メディア、特に放送が戦争の映像をどのように撮影し、いかなる過程を通して世界の人々に伝えるのかを分析し研究するために、放送技術の発達とそれがはじめに適用された大戦争に研究者達の注目が集まるのである。すなわち、戦争とメディアに関する研究は 1960 年代のベトナム戦争、1990 年代の湾岸戦争のような軍事技術において大転換を起こした大戦争の現場を放送がどのように伝えたかに注目する傾向がある。周知の通り、ベトナム戦争とはその生々しい映像を人々がテレビ放送を通してはじめて接した最初の戦争である。あるベトコンの処刑 (execution of a Vietcong) と言われる映像は捕虜となったベトコンが、南ベトナムの警察の本部長に路上で射殺される酷い場面である。カメラマンが戦争の現場に持っていける ENG (Electronic News Gathering) で死刑が執行される瞬間の場面が撮影されテレビ放送のニュースになったのである。その衝撃的な映像はアメリカ国内で反戦の世論に火をつけ、その後ベトナムから送られてくる様々な映像はアメリカがベトナムから撤退する主な原因の一つになったのである。1990 年代初めの湾岸戦争におけるニュース映像とその伝送路は、ベトナム

戦争のそれとは全然変わっていた。我々は空襲攻撃によってイラクの軍事施設が破壊される映像を、まるで電子娯楽ゲームを見るような感覚で戦争のニュースから得ていたのである。そしてバグダッドに空襲が始まった時間にアメリカの CNN をはじめとする、世界の主要放送局がバグダッドから戦争開示の模様を衛星経由で即時に伝えられるニュースのグローバル化現象を作り出した。このハイテク報道技術を SNG (Satellite News Gathering) システムと呼んだのである。

ロシアのウクライナ侵攻戦争は前の戦争ニュースの普及とは全く異なっている。まずプーチン大統領の宣戦布告演説はロシアの報道機関が YouTube 上で配信した。Twitter 上でも複数のユーザーから、ウクライナの各所で火の手が上がっていることが報告されるなど報道機関より先にネット上にニュースが流されたのである。戦争映像の撮影においてもドローンを使って戦車の戦闘場面を生々しく撮影して YouTube 上で配信するなど新しい映像撮影技術と伝送技術が活用されたのである。このようにニュース普及過程は映像技術と伝送技術の発達によって今後もさらに変わっていくであろう。

青池先生の『ニュースの普及過程分析』が出版された時期から今までも、映像技術と伝送技術との発達によってニュース普及過程に変化が起きていると思われる。その変化に関する研究を行い、いつか自分の研究成果を少々付け加える時がきたらいいなと考えている。

【文献】

青池愼一(2012). ニュースの普及過程分析, 慶應義塾大学出版会.

Larsen, O. N., & Hill, R. J. (1954). Mass media and interpersonal communication in the diffusion of a news event. *American Sociological Review*, *19*(4), 426-433.

Miller, D. C. (1945). A research note on mass communication. *American Sociological Review*, *10*(5), 691-694.

Rogers, E. M. (2000). Reflections on news event diffusion research. *Journalism & mass communication quarterly*, *77*(3), 561-576.

（きむ　かんきゅう　東国大学メディアコミュニケーション学科）